

皮膚科問診票

◇ おなまえ	◇ おとし	歳	男・女
1. 京大皮膚科の受診は初めてですか？			
() はい	() いいえ	() ヶ月前	() 年前 に受診した
() 定期検診	() 6ヶ月	() 1年	()
2. きょう、受診することになった症状はなんですか？			
症状 ()			
その症状は、いつから、どこに出ましたか？			
いつから ()		どこに ()	
どのようにになりましたか？			
*経過が長い場合はくわしく教えてください。*他の病院にかかったことがある場合も教えてください。			

問診票を読み取る

梶島 健治

京都大学大学院医学研究科皮膚科学教授

僕は子どものころから、いまだみぬ世界に想像を思い巡らせ、そして自分の予想(理想)と現実の相異を検証する作業が好きであった。そういう意味で、学生時代はバックパッカーにはまった。できるだけ『地球の歩き方』や『Lonely Planet』などのガイドブックがない国、しかも旅行者がまず来ないような街、あるいは絶対に行ってはいけないといわれる危険区域に積極的に足を運んだ。見知らぬ人にでも、誘われたら断らない主義だった。その結果、まったく予想もつかないできごと遭遇し、そこで次にどんなことがおこるのかと思い巡らせながら、ベストと思う選択を即決していく。ときにひどい目に遭うわけだが、それでもなんとか生き残れて安堵し、それはそれで貴重な経験となった。いまはそんな無茶はできないけれど、臨床や研究にもどこかしら共通点がある。

ちなみに京都大学医学部附属病院の患者さんは、皮膚科問診票に記入することとなっている。患者さんと呼んでから、入室するまでの間に問診票をみる。しかもかなり真剣にみる。「字は人の心を表す」というが、患者さんの筆跡から、几帳面、神経質、おおらか、いい加減、などの性格がある程度読み取れる(ちなみに僕は悪筆)。そして次に、症状の記載を眺める。明快で簡潔な問診票などほとんどない。

ほぼ白紙だったり(→コンプライアンスが悪いことをある程度覚悟する。あるいは、さっさと診断してもらって薬を処方してくれればそれでいい、と考えている人もそういう傾向がある)、的外れな記載をしていたり(→こちらが説明してもきちんと理解してもらえないことを覚悟する)、A4の紙では足りないくらいびっしりと書き込んでいたり(→ちょっと診察が長くなることを覚悟する)、あるいは「わからないからここに来た」などと喧嘩を売ってくる方(→これもちょっと診察が長くなることを覚悟する)などさまざまである。また、問診票にはたくさん記入しているのに、診察中はおとなしくてほとんど語られないシャイ(?)な方もおられる。

それゆえ、問診票からは実際の診察ではみえてこない情報が入手できる。入室前に、患者さんがどんな雰囲気の人かを予想し、そして実際に診察してみ、自分のイメージとどの程度合っていたかを毎回チェックしている。このプロセスを25年もやり続けていると、問診票だけからでも、それなりにある種の世界がみえてくる。もしも「直観」という能力があるとするなら、僕は結構いい線いっているのではないかと過信したりすると、ときに大外れをする。自惚れてはいけない。